

ピリピ3章14～17節「私たちの国籍は天にある」

私たちキリスト者は、召天した兄弟姉妹も、神の恵みによって救われました。私たちを愛してくださる神の愛を知り、神の御前に自分の罪を認め、救い主イエスを信じて、救いを頂きました。救いに入れられた時には信仰者として幼子のようにありましたが、少しずつ成長させて頂き、やがて天の神の栄光の中に入ることができます。キリスト者のこの世での歩みは、やがて天の御国に迎えられるときを目指している歩みです。

1. 倣うことの意味（: 17）

13～14節。信仰者の生涯を、賞をいただくことを目指して一心に走っている競技者の姿にたとえています。そして、自分自身がそのように生きているとパウロは証ししています。

このような自分自身の歩み、また信仰者たちの歩みに倣う者となるようにとパウロは勧めます。17節。

ここで「倣う者」と訳されていることばは、「共に」という前置詞と「倣う、見習う」という動詞が複合したものです。一緒に見習うという意味合いがあります。私たちの信仰生活とは兄弟姉妹と一緒に歩むものです。共に主キリストを見上げながら歩むのです。

そして、一緒にパウロに倣うのであれば、パウロだけでなく、お互いの信仰生活に見習うということにもなるでしょう。「あなたがたと同じように私たちを手本として歩んでいる人たちに、目を留めてください」と言われている通りです。互いに見習って信仰生活を励んでいくことがお互いにとって有益なのです。

もう一つ大切なことがあります。Iコリント11:1。パウロは、自分がキリストの生き方に倣っていたからこそ、「あなたがたも私に倣う者でありなさい」と大胆な言い方をすることができたのです。私に倣う人は、私が主イエス様に倣おうとしていることをよく見て欲しいということです。つまり、彼は自分を指し示しているのではなく、キリストを指し示しているのです。いつでもキリストが中心です。

当時と違い、私たちは聖書を手に入れています。いつでも福音書や聖書全体からキリストのことを知ることができます。そして、キリストに倣う者でありたいという願いと祈りが起こされます。それでも、キリストの完全な姿を思う時に、自分との落差の大きさに気が引けてしまうことがあります。そんな時にも、共に信仰生活をしている兄弟姉妹であれば、身近に感じられると思います。自分と同じように問題に悩み、苦闘している兄弟姉妹の姿から励まされ、教えられ、そして倣いたいと思うようになるでしょう。それでも最終的には共にキリストに倣うことになるのです。

私たちもパウロの生き方に倣い、信仰の先輩たち、召天された方々や兄弟姉妹の生き方に目を留めたいと思います。彼らはキリストの十字架を仰いで、天の御国の希望を持って、生涯を歩みました。そして、その生涯において、神、主の様々な祝福をいただき、主への感謝のうちに、信仰の生涯を全うすることができました。その兄弟姉妹たちの信仰の歩みに共に倣い、共にキリストに倣う者になりたいと思います。

2. 倣ってはならない生き方（: 18～19）

このような意味で「私に倣う者となってください」と勧めてから、パウロはそう勧める理由を語ります。それは、倣ってはならない生き方をしている人々がいるからです。

18節。ここにパウロの激しい感情が示されています。これまでも度々忠告してきたことがありました。それなのに、今また忠告しなければならないと言います。しかも「涙ながらに言う」のです。それほどにパウロが憂えているのは、「多くの人がキリストの十字架の敵として歩んでいるからです」。

教会はイエス・キリストによる救いを宣べ伝えています。その福音を聞き、キリストの十字架に表された神の義と愛を知り、自らの罪を認め、キリストが身代わりとなって死んでくださったことを受け入れる人は救われます。ところが、キリストの十字架の意味を知らない人、あるいは知っても受け入れない人が多くいます。

そのような「キリストの十字架の敵として歩んでいる人」の特徴をパウロは挙げています。19節。

四つの面から特徴を語っています。第一は、彼らの最後です。「その人たちの最後は滅びです」。厳しいことですが、キリストの十字架による救いを確信しているので、その裏返しとして、滅びも確かなことであると告げるのです。

ある人たちは礼拝に出席しながらも、罪を悔い改めて、罪から離れて生きることを祈り求めることがありません。「恵みが増し加わるために、私たちは罪にとどまるべきでしょうか。決してそんなことはありません」（ローマ6:1）とパウロが言っているのですが、それは、恵みを受けるために罪にとどまっていけないのだと言う人たちがいたということでしょう。もちろん、罪を犯さないようにと願っていても、罪を犯してしまうことがあるでしょう。私たちは完全ではありません。

しかし、だからと言って罪を犯していても良いということにはなりません。罪に対して鈍感であったり、開き直っていたりするなら、本当の意味で十字架の恵みを受け取ることにはならないのです。そのような態度はキリストの十字架の敵として歩んでいるのです。

第二は、彼らの神です。と言っても偶像です。「彼らは欲望を神とし」ているのです。自分たちは恵みによって救われるのだから、神の律法はもういらないのだと考える人たちもいたようです。みことばに聞き従うよりも、自分の欲望に仕えて生きる、自分の願いが成ることを追求するのです。そのような態度が自分の欲望を神とすることなのです。

第三は、彼らの道徳的に間違った判断です。「恥ずべきものを栄光と」します。キリスト者は救われて自由になったのだから、自由に生きると言うのですが、実際には恥ずべきことを行っている者もいたのでしょう。「兄弟たち。あなたがたは自由を与えられるために召されたのです。ただ、その自由を肉の働く機会としないで、愛をもって互いに仕え合いなさい」(ガラテヤ5:13)とされています。そのような人は、結局は罪の奴隷となっているのです。

第四は、彼らの間違った目標です。彼らは「地上のことだけを考える者たちです」。彼らが考え、求めるのは、この世のことです。この世の楽しみ、富、成功、名誉、力などを求めます。パウロは「キリスト・イエスにあって神が上に召してください」といいますが、彼らはそれとは違い、天における報いには目を向けません。地上のことだけです。そして、地上のものはすべて一時的で、不安定で、過ぎ去るものであるのに、それらを追い求めるのです。

このように考えてみると、パウロが涙ながらに「キリストの十字架の敵として歩んでいる」人たちの特徴を語り、そのような歩みをしないで、「私に倣う者となってください」と勧めた理由がよく分かります。

3. 倣うべき生き方 (: 20~21)

倣ってはならない生き方を述べた後に、パウロは倣うべき生き方はどのようなものであるかを語ります。キリスト者たちが倣うべき生き方は天を思うことだと言います。20 節。

ピリピの人たちが国籍と聞いて思うのはローマ帝国のことだったでしょう。ピリピにはローマ市民権を持った人々がいたでしょう。彼らは、皇帝のいるローマから遠く離れたピリピに住んでいるが、自分たちはローマの市民権を持ち、特権にあずかり、ローマの国籍を持つ者であることを誇りとしていたでしょう。

それに対してパウロは、キリスト者たちの国籍は天にあると言います。天とは神がおられるところです。その右の座にキリストが着いておられます。天とこの地上との間には、人の努力や能力では決して超えられない隔たりがあります。しかし、キリストが天から地上に來られ、人となられて、十字架によって地上から天への架け橋をかけてくださいました。キリストを信じる者は、やがて天に入ることができます。この地上にある時から、国籍が天にある者となるのです。今私たちはこの地上にいますが、キリストを信じて、今すでに国籍が天にある者としていただいたのです。そして、天の御国の民としての恵みと特権をいただいているのです。

そして、国籍が天にあるかないかの区別がはっきりする時が來ます。それはキリストが再臨される時です。その時には、すべての人が復活し、キリストはすべての人を二つに分けます。天に国籍がある者となない者に分けるのです。そして、天に国籍のない者たちは永遠の刑罰に入らなければなりません。「その人たちの最後は滅びです」。しかし、天に国籍のある者たちは、天の御国に入ることができます。

その時には、キリスト者たちは栄光のからだをいただきます。21 節。私たちが地上に生きている間のからだは、罪を犯し、病を経験し、苦しみを味わい、やがて大地のちりに帰ります。しかし、そのような「卑しいからだ」をキリストが「ご自分の栄光に輝くからだと同じ姿に変えてくださいます」。天の御国にふさわしいからだ、もはや罪も死もない、朽ちることのないからだです。キリストがからだを持って復活されたように、同じようなからだを与えてくださるのです。そして、天の御国で永遠に神と共に住まうことができるのです。

このことこそ、私たちキリスト者に保障されている最大の、最高の祝福です。このことを信仰によって受け取り、希望とし、誇りとして生きることがパウロの生き方であり、キリスト者たちが倣うべき生き方です。

私たちも天に国籍のある者としての信仰と希望に生きていきましょう。パウロの生き方に倣い、また召天された方々の歩みを思い起こし、イエス・キリストを信じる信仰に生き抜くことができるように祈りましょう。神の恵みにより、キリストの十字架と復活によって与えられた救いを感謝して、天の御国を目指して生きていきましょう。やがて天の御国に入ることができ、先に召天された方々と共にキリストと父なる神を賛美し、礼拝することを待ち望みながら生活し、その希望を証ししていきましょう。